月刊　教育情報誌

明日への学び

第　１５　号

２０１４年　４月２５日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

平成２６年度 福井の教育の新たな展開

学校現場では、３月に卒業生を送り出したのもつかの間、新たに入学生を迎え、慌ただしく平成２６年度のスタートが切られたことと思います。４月は、新入生だけではなく、教員も在校生も学校全体としても、環境が一気に変わる時期です。子どもへの対応に事務的な業務も加わって、目の前のことで手一杯になりがちです。しかし、そんな時期であっても、この４月は新年度開始の１か月として、しっかりと先を見据えることが大切です。この１年間子どもたちとどう関わっていくのか、どのように子どもたちを支援していくのか、まず「自分が担当する子どもたちとの１年間」をイメージしてみてください。さらに、忙しい中でも児童･生徒一人ひとりをよく観察し、声かけをしながら、是非それぞれの子どものもっと先の将来（数年後だけでなく１０年、２０年後）をイメージして、子どもたちと関わってみてください。

中でも、すべてが初めての新入生は、不安なことが多く、落ち着かない日々を送っていることでしょう。保護者も同じような気持ちではないかと思います。しかし、将来への希望に胸をふくらませ、全力投球する初々しい子どもたちの姿を目にして、「元気に成長してほしい」「自分も負けずにがんばろう」と感じるのは、４月ならではの喜びでもあります。子どもたち、保護者、そしてそれを見守る地域の方々とともに、前進していきましょう。

福井県では、子どもたちの将来や、福井県、ひいては日本の教育の将来を見通して、今年度も事業を展開していきます。本号では、英語教育やサイエンス教育の推進、ＩＣＴ機能の活用研究、子どもたちの夢や希望を育てる事業、ふるさと教育、さらには教員の新たな研修・研究体制確立などについて紹介します。さらに今回の記事の中には、教育研究所機能強化の提言や、他から見た福井の教育への提言なども盛り込まれています。日本や福井の子どもたちの未来のために、やるべきことは何なのかをしっかり見据えながら、新しいスタートを切りましょう。

＜目　次＞

○世界に通じる英語・サイエンス教育　Ｐ　２
○教育研究所の機能が強化されます　Ｐ　４
○スマート教育の推進・ふるさと教育・夢や希望　Ｐ　６
○外から見た福井の教育と外に出てわかった福井の教育　Ｐ　８
○中高授業接続ガイド重点指導ポイントについて　Ｐ１１
○連載「希望学」⑤～中村尚史氏インタビュー～　Ｐ１２
○報告「中高授業改善事例に関わる公開授業③」　Ｐ１３
○おしらせ　Ｐ１４

（英）全教員向け
（理数）高校教員向け

福井の教育の新たな展開①

世界に通じる英語・サイエンス教育

福井の高い学力を支える一翼を担っている、英語教育とサイエンス教育について、さらなるレベルアップを図るための取組みを報告します。

○「使える英語力」の育成

「話す」「聞く」ことを重視した授業で、自分の考えをきちんと表現できる「使える英語力」の育成を目指します。そのために平成２６年度は、校種別に「新しい英語授業の進め方」に基づいて授業を進めていきます。参考として、高校用を右に掲載します。高校英語の改善の趣旨は、英文法や英文解釈などの「理解中心の授業」から「生徒が英語を使う授業」に変えることです。

また、オリジナル教材を活用した授業も推進します。昨年度作成した「福ーイングリッシュ」をすべての県立高校１年生に配付して、年間指導計画の中に位置づけて活用していきます。職業系高校の生徒向けには、「話せる英語力」を育成するオリジナル教材を作成していく予定です。

新しい英語授業の進め方＜高校＞

1　和訳をゴールとせず、英語を使って活動しながら思考し、自分の意見や考えを表現する授業を行います。

2　学習意欲を高めるために、生徒に英語で表現できる喜びを与え、知的に楽しい授業を行います。

3　音読や要約などの十分に行った家庭学習が発揮される活動を取り入れた授業を行います。

4　スピーチや音読などの様々な活動を授業で行い、評価に取り入れます。

5　中学校の学習内容を把握するとともに、高校で教えるべき項目を精選した授業を行います。

○英語教育強化地域拠点を指定

次年度の学習指導要領改訂に合わせ、小・中・高の一貫した教育課程を研究するために、今年度、英語教育強化地域拠点として勝山市が指定されました。小学校３校（成器西小、村岡小、野向小）、勝山中部中、勝山高校を中心に、授業改善および児童生徒の英語力向上に向けて研究を進めます。

○教員指導力の向上研修

今年度も英語教員の海外派遣を実施します。１２名を米国に４週間派遣する予定です。また小学校教員の英語力向上研修を、４月には小学校４年生担任を対象に、８月には小学校５，６年生担任を対象に実施します。中学校教員の集中研修（３日間）と高校教員研修（２回）も予定しています。さらに今年度は、中央研修を受講する「英語教育推進リーダー」（福井県で小学校２名、中学校１名、高等学校１名）による県内中核教員への研修会の実施も計画しています。

○英語教育推進重点校（スーパーグローバルハイスクール）の支援

文部科学省は、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成することを図る「スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）」指定事業を本年度から開始しました。本年度の

指定５６校の中に、本県から高志高校が選ばれました。また敦賀高校が、ＳＧＨ事業をふまえた教育の開発・実践に取り組むＳＧＨアソシエイト（全国で５４校）として指定を受けました。県教育委員会でも、関係機関と連携しながら、各校の取組み支援を行っていきます。

高校生語学海外研修の様子

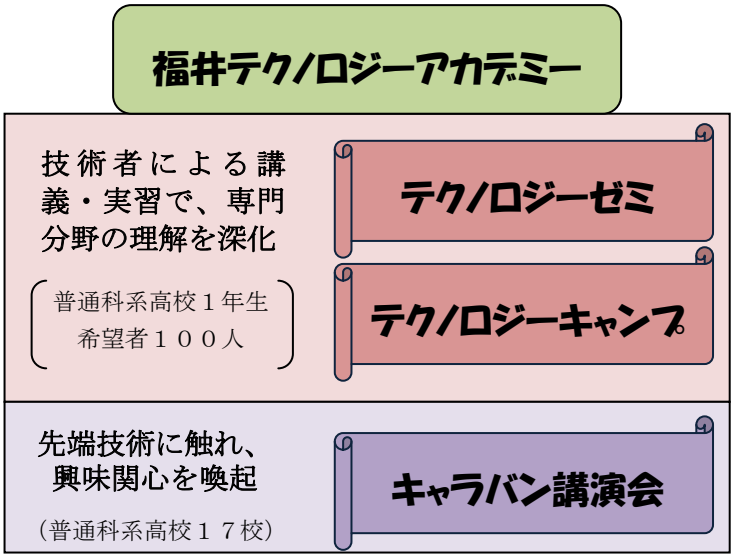
○理工系大学志願者への支援

全国的に理数離れが進む中、本県の普通科高校においては、理系学部への志望者が多い傾向が続いています。その理系志望者の約７割が理工系学部を志望していることから、普通科高校においては、授業で触れる機会の少ない先端科学技術分野の学習をより充実させることが大切となっています。

そこで、高校生を対象として、「福井テクノロジーアカデミー」を開講します。専門分野の講義・実験等を行うゼミや、企業・大学等における研修を実施することによって、将来の理工系大学進学に役立つような支援を行っていきます。

○福井テクノロジーアカデミー

おもに右のような３つの事業を行います。テクノロジーゼミとテクノロジーキャンプは普通科系高校１年生の希望者１００人を対象とします。日本を牽引する技術者や研究者等を講師陣に迎え、年間を通した特別講義や訪問研修を実施します。テクノロジーゼミは、国際的に活躍する講師による特別講義で、テクノロジーキャンプは、グローバル企業や理工系大学等で講義や実習を受ける内容となっています。



キャラバン講演会は、普通科系高校において、日本を代表するものづくり企業の技術者・起業家・科学者等を招へいし、講演会等を実施するものです。普通科系高校の場合、１年生の生徒には、福井テクノロジーアカデミーへの参加呼びかけをお願いします。

○教員の専門性向上のために

生徒への支援と同時に、最新の科学技術を伝えられるよう、理科教員の指導力向上が必要です。そのために、大学等の機関と連携した研修を実施します。高校理科教員の研究会を、物理・化学・生物・地学の４分野で立ち上げ、各分野の研究者を招いて先端研究を学ぶとともに、研究者のセミナーにも参加します。また、教育研究所においても、分野を横断したテーマ（宇宙や生命など）での実践型集合研修を開催する予定です。

教員自身が専門分野の知見を拡げ専門性を高めることによって、最先端の知識を伝え、生徒の興味関心を喚起し、将来の日本や本県の産業を支える人材の育成につなげていってください。

理科教員の研修会の様子

全教員向け

福井の教育の新たな展開②

教育研究所の機能が強化されます

福井県教育研究所は、１９５０年の開設以来、教育の調査研究や教職員の助言機関としての役割を果たしてきました。中でも、１９５１年からは県独自の学力調査を実施し、結果分析や授業改善支援によって、福井県の全国トップクラスの学力を下支えする役割を担ってきました。

しかし社会情勢の変化にともない、現代の教員に求められる資質・能力は大きく変化しています。教員には、新しい見識を得て、時代の変化に対応した教育をすることが求められています。このような状況に鑑み、昨年度、福井県学力向上センターでは、教育研究所機能強化検討委員会を立ち上げました。そして５回にわたる検討を重ね、２月に提言をまとめました。その提言の内容と、提言をもとに改められた今年度の新体制についてレポートします。

○教育研究所機能強化検討委員会提言

提言では、まず教育研究所の現状と課題として、「教育研究」「教員研修」「教育相談」「学力に関する調査業務」の４点から分析が行われています。次に教育研究や教員研修などが必要になっている現在の社会情勢として、「ＩＣＴ活用」「グローバル社会」「社会の多様化」「教育制度改革」のキーワードからまとめられています。そして、現状分析をふまえて、今後のさらなる機能強化について、以下の４点から提言を行っています。

1　日本の教育センターとして最先端教育に関する研究機能の強化
2　次世代の児童・生徒を育てる力のある教員を育成する研修システムの確立
3　子どもたちの個性を伸ばす教育支援業務の充実
4　学校の実情に的確に対応する教育相談体制の整備

「１」では、福井県が、日本の教育をリードする教育センターとして最先端教育を展開するために、専任研究員や学校現場の中核教員、外部専門研究者等で構成する研究チームにより、各研究課題に対する研究ユニットを整備すべきとしています。

「２」では、研修をより受講しやすい体系に改めるため、通信研修の導入、集合研修における実践型研修の充実、学校への訪問研修の充実を提言しています。

「３」では、本県独自の学力調査におけるこれまでの作問や分析方法を見直すなど、新たな調査方法について検討を進めるべきであるとしています。

「４」では、身近に教育相談を求めている保護者または児童・生徒、授業方法・生徒指導などに悩む教員からの相談に対応するため、教育研究所の相談対応ネットワークの強化について記しています。

＜機能強化検討委員会＞

※敬称略、所属等は昨年度のもの

□委員

秋田　喜代美	東京大学大学院教育学研究科教授
大島　まり	東京大学大学院情報学環教授
横田　保美	栄光ホールディング広報部長
柳澤　昌一	福井大学教職大学院教授
徳本　範子	敦賀市教育委員
中島　嘉文	福井県教育研究所長
林　雅則	福井県教育長

□オブザーバー

内田　高義	福井市教育長
小林　修二	福井県小学校長会長
徳島　泰彦	福井県中学校長会長
西川　満	福井県高等学校長協会長
原口　典子	福井県立福井東特別支援学校長

～教育研究所が変わります～

○より実践的な集合研修を実施します

教員が集合研修に費やす時間を、授業改革の研究とその準備や、生徒の個別指導の時間に活用するため、研修をより受講しやすい体系に改めます。具体的には、平成２５年度に１４３講座開講されていた集合研修を、平成２６年度には６５講座に減らしています。

集合研修の中の２２講座については、模擬授業等を取り入れたロールプレイイング方式のものとし、より実践的な研修を増やしました。これらの研修を有効活用するためにも、講座を計画的に受講するとともに、校内研究会や教科研究会などで、研修で得た内容を他の教員にも拡げて、学校全体への浸透を図ってください。

平成２６年度特色ある研修講座の紹介

＜実践型集合研修＞

□B001 小学校国語「目指そう分かる授業」
期日：７月８日
内容：言語活動の充実と模擬授業や相互評価
講師：玉川大学　輿水かおり 教授

□B131 小中学校社会「伸ばせ！思考・判断・表現力」
期日：７月２９日
内容：思考・判断・表現する力を育てる授業づくり
講師：安田女子大学　片上 宗二 教授

□D001 「教育羅針盤～教育の今と未来を見つめる～」
期日：７月２日
内容：授業における児童生徒の学びの見取り
講師：埼玉大学教育学部　北田佳子 准教授

＜ＩＣＴを活用した授業改善研修＞

□B132 中高社会、地歴・公民「タブレットで授業改善！」
期日:６月２７日　講師:ＪＳＴ前田辰雄主任調査員他

□B331 理科「やってみよう！タブレットで授業改善」
期日:６月２７日　講師:ＪＳＴ前田辰雄主任調査員他

□C704「見てみたい！小学校ＩＣＴ授業」
期日:６月１９日　内容:iPad を活用した授業改善

○新しく「通信研修」を開始します

学校や自宅のパソコン等で、教科指導やマネジメント等の基礎基本を学ぶことができるよう、通信研修を整備していきます。平成２６年度中に３０講座、平成２７年度末までに１００講座配信する予定です。

○効果的な訪問研修の実施を目指します

今年度も、それぞれのニーズに応じた訪問研修を実施します。教科指導、学校改善、情報教育、教育相談および生徒指導等に関する支援をはじめ、さまざまな支援を実施します。さらに各市町、県立学校等の指導主事訪問にも、研究所所員が積極的に同行します。継続的な支援や、外部人材を活用した支援等、効率的で効果的な訪問研修を実施することによって、学校現場と連携しながら、学校における課題の解決を支援します。

○組織の再編と、最先端教育に関する研究機能の強化

教育研究所の組織も、「教職研修課」「教科研修課」「科学情報課」「教育相談課」の４課を、新たに「研修部」「調査研究部」「教育相談部」の３部に再編成しました。これによって、機能強化検討委員会からいただいた提言の中で、「研修部」では「研修システムの確立」を、「調査研究部」では「研究機能の強化」体制を構築していくことになります。

調査研究部は、「ユニット制」を敷きます。これは、研究テーマに応じて既存の枠を超えた柔軟な研究チームを編成するためのものです。４月からは、「学力調査分析ユニット」「数学ユニット」「英語ユニット」の３つのユニットでスタートしています。また、学力向上センターと教育研究所が一体となって、学力向上に関する研究を進めていきますので、県教育委員会全体での研究体制が整うことになります。このような研究体制は始まったばかりですが、学力トップを走る福井の教育研究機関として、日本の教育のリーダー的活躍が期待されています。

県立学校
教員向け

福井の教育の新たな展開③

スマート教育の推進

～ＩＣＴを活用した新しい授業の実践研究～

教育のＩＣＴ化が全国的にも広がりを見せていますが、本県でも学力の一層の向上を目指し、個々の児童・生徒の伸びる力を引き出すために、ＩＣＴを活用した新しい授業の導入を、高校を中心に推進していきます。普通科高校のみならず、職業系高校、特別支援学校などで、各教科の実践推進校を指定し、実践・研究を進めていきます。ここにその概要を報告します。

このほか、「ふるさと教育」推進事業や、「夢や希望を育て未来を築く教室」開催事業についても、概要をまとめます。

○高校における新しい授業の実践とＩＣＴ機能の活用

該当教科ごとに県立学校１０校をモデル校に指定します。生徒にタブレット端末を貸与して、新しい授業づくりの中で、その活用について実践・研究を重ねます。モデル校としては、普通科高校のみならず、職業系高校、特別支援学校なども指定します。モデル校における各教科の取組み内容は下の通りです。

＜英語（３校）＞　タブレット端末を利用して、デジタル教科書の活用を図ります。さらに英語によるプレゼンテーションを行ったり、インターネットで海外の記事を読んだりするなど、英語を中心とした実践的な授業を推進します。

＜数学（２校）＞　タブレット端末を持ち帰り、自宅で課題を解説する動画を視聴することによって、授業の効率化を図ります。また生徒の理解度に応じて、応用問題または基本的内容の繰り返し学習を行うなど、生徒の習熟度の差に対応した授業を実施します。

＜理科（１校）＞　ＳＳＨ指定校の課題研究において、学術情報の検索や実験・研究履歴などの蓄積にタブレット端末を活用することで、学校内外での研究継続・発展を図ります。

＜職業教育（２校）＞　工業科、農業科において、地元企業と連携した高度な機器制御や植物栽培の研究などにタブレット端末を活用することにより、就労後の実践的なＩＣＴ活用能力を身につける授業を実施します。

＜特別支援教育（２校）＞　視覚障害、知的障害をもつ生徒にタブレット端末を貸与し、ＩＣＴ機能を活用して、自立学習やコミュニケーションを支援する教育を実施します。

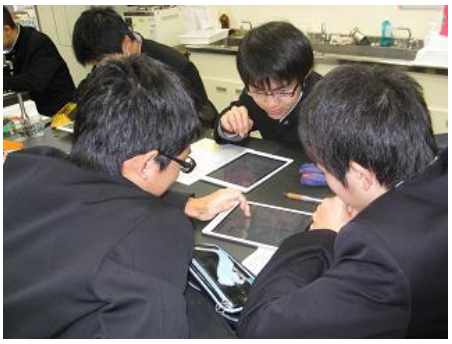
○教員の活用能力向上

昨年度、全県立高校と、県内公立中学校社会・理科の教員に対して、タブレット端末の基本操作

研修会を実施しています。今年度も、教育研究所の研修メニューをはじめ、モデル校での機器活用研修などを実施していきます。また、ＩＣＴ活用の公開授業なども計画していきますので、先生方の積極的な参加をお願いします。

○自主学習を支援するシステムの開発

生徒が自宅のパソコンやタブレット端末から、課題のポイントを解説する動画、理科・社会の映像教材、過去問題集などの教材にアクセスして、自主的に学習に取り組むことができる環境づくりの構築を図っていきます。現状では、アクセスサーバー（クラウド）の問題や、コンテンツ開発などの課題がありますが、スマート教育の推進に向けて研究を重ねていきます。



タブレット端末を利用した授業の様子（於：藤島高校）

全教員向け

「ふるさと教育」の推進

○本県の先人の生き方や考え方等を学ぶ読本を作成

橋本左内、由利公正など、本県ゆかりの優れた先人がたくさんいますが、こうした方々の生き方や考え方について学ぶことができる読本を作成していきます。内容としては、業績や考え方、行動、逸話、転機となった出来事などを盛り込み、同時に、当時の時代背景・世情や人物相関、地理的な内容なども学べるようなものを想定しています。

左内公園（福井市）の橋本左内立像

高校教員向け

「夢や希望を育て未来を築く教室」を開催

○「福井ふるさと教員」による授業の実施

高校生が、将来に向けて具体的な目標を持ち、その目標に向けて主体的に努力していけるよう、福井県にゆかりがあり各分野の第一線で活躍する方に、「福井ふるさと教員」として授業をしていただきます。今年度新たに開始する事業ですが、すでに今年１月に、伊藤忠商事(株)会長の小林栄三氏に、若狭高校２年生の文理探究科で授業をしていただきました。生徒との双方向のやり取りが多く、有意義な授業となりました。小林会長には、授業の後、若狭高校の若手教員との懇談会もお願いし、教員も貴重なお話をうかがう機会を得ました。

今年度は、１０校程度の学校で、「福井ふるさと教員」による授業を実施する予定です。講演形式ではなく、生徒との双方向のやり取りを行う授業の形態で実施します。生徒にとっては貴重な経験となるはずです。授業の様子はＤＶＤに収録し、県内の高校に配付する計画となっています。授業の機会が得られなかった学校でも、是非、ロングホームや総合的学習などで活用してください。

全教員向け

外から見た福井の教育、外に出てわかった福井の教育

３月２日（日）に平成２５年度の「学力向上フォーラム」が、県立図書館多目的ホールで開催されました。県外からの参加者も含め、２００名近くの一般市民や教育関係者の参加がありました。川畑紀義県教育委員会委員長の挨拶のあと、第Ⅰ部では県外へ派遣されている福井県の先生が、「県外に出てわかる福井の教育」と題してシンポジウムを行いました。第Ⅱ部では、県外から福井県に派遣されている先生が、「県外から見た福井の教育」と題してシンポジウムを行いました。第Ⅱ部の最後に、コーディネーターを務めた常葉大学教職大学院の小松郁夫教授から、「今後の福井の教育」についての提言をいただきました。

～第Ⅰ部～

「県外に出てわかる福井の教育」

シンポジスト	茨城県立日立第一高等学校附属中学校	林　誠司
	静岡県立浜松西高等学校	西川潤也
	長野県屋代高等学校	高野修一
コーディネーター	東京事務所　企画主査	戸羽嘉和

シンポジストとコーディネーターから出された福井の教育の良いところと提言を列挙します。

○福井の教育のよいところ

・学校が最高の教育機関である。家庭と学校の間に信頼が成り立っており、良い意味での相互依存関係がある。
・家庭と学校の連携によって身についた生活習慣が、学習に打ち込める素地・基盤となっている。
・家庭も学校も、給食や食事を残させない、宿題をきちんとやらせる指導をする。
・学校と地域と家庭が同じ価値観で動いており、連携がとりやすい。
・学校が塾の役割も担っており、教科指導、生徒指導に加えて進学指導も行っている。
・中学校で３０人学級にするなど、少人数によるクラス編成を行っている。
・「現役で国公立大学に合格させたい」という暗黙の意思統一がある。
・すべての校種の免許を持った先生が多く、異校種間での人事交流が盛ん。

○福井の教育に対する提言

・まじめで勤勉だが、保守的で目立つことを好まない文化がある。新しいものをどう取り入れていくかが重要である。

・福井にいる間、他県のことも福井のこともよく知らなかった。視野を広く持ちにくい県であるように感じる。福井の教育について県民全体で考えていくことも大切である。
・子どもにとって、教員や保護者が最高に尊敬できる存在となっている。日本や世界をリードする技術者・企業経営者などの話を聞く機会を増やすとよい。教員も学校以外の様々な分野に興味を持ち、子どもたちの視野を広げていけるような教育が大切である。

最後に、コーディネーターを務めた戸羽先生が、「今幸せだと思っていることが、２０年後、３０年後の子どもたちにとって幸せだとは限らない。産業革命以来、時代は大きく変化しており、２０年後、３０年後に子どもが幸せだと感じるような教育を、時代に合わせてスピード感を持ってやっていく必要がある。」という中教審会長・安西祐一郎氏の言葉を引用してまとめました。

～第Ⅱ部～

「県外から見た福井の教育」

シンポジスト	福井市松本小学校	中上敬介（長野県）
	福井市進明中学校	松永尚子（熊本県）
	坂井市立丸岡中学校	北原成之（佐賀県）
	越前町立朝日中学校	吉野直美（茨城県）
	敦賀市立敦賀南小学校	内海誠之（茨城県）
コーディネーター	常葉大学教職大学院　教授	小松郁夫

５人のシンポジストから出された、福井の教育について感じたこと、自県の教育の良いところ、福井の教育の課題を以下に挙げます。

○福井の教育について感じたこと

・先生は朝早くから夜遅くまで勤勉に働いている。職員室で学校以外の話がほとんど出ない。
・積極的に授業を公開し、熱心に授業研究に取り組んでいる。
・授業研究部が計画する研究会以外にも、声をかけ合って自主研究会をする姿が多く見られる。
・宿題の提出率はほぼ１００％である。
・授業中ほとんど私語がない。聞く態度がよい。
・ワーク・ノートの確認など、きめ細やかな指導が行われている。

他県ではあたりまえではない
福井のあたりまえ

・通知表を保護者に渡す
・定期テスト以外にもテストが多い
・中学３年生は秋になると放課後の補習をする
・副教材の購入が多い
・小学生は業間によく遊び、よく走る
・休業中の宿題などの学習計画が詳細に提示されている
・勤務時間外でも、会議や打合せをする

・「あたりまえ」を徹底して行っており、「あたりまえ」の質が高い。学校、クラス、教員による温度差が少なく、一致して取り組んでいる。
・白川文字学を基本とした漢字教育が徹底しており、子どもたちの漢字に対する苦手意識があまりない。
・先生は常に生徒と向き合おうとしている。補充学習指導を丁寧に行っている。打合せは生徒の下校後に行うなど、生徒と向き合う時間を多くとっている。時間を度外視して生徒のために尽くしている。
・郷土愛が深く地域の行事に大変よく参加している。脈々と受け継がれてきた、地域と密着した

教育力を感じる。

・家庭での食事の管理が行き届いていて、肥満傾向の生徒が少ない。
・ＰＴＡ活動の父親の参加率が高い。家族全員で子どもを支えていると感じる。
・給食は地産地消のものが多く、魚料理も多い。残さず食べる教育も徹底されている。
・休日に先生がボランティアで学習会を開催しており、生徒も前向きに参加している。
・部活動の加入率が高く、朝練習にも積極的に参加している。

○出身県の教育の良いところ・福井の課題　※（出）―出身県

・（出）は自己主張をする子どもが多い。人と違うことをするのがよいことだという文化がある。
・（出）は特別支援教育が充実している。
・（出）では、県独自の学力テストを小３～中３までのすべての学年で行っている。
・（出）では福井に比べて元気な子どもが多い。生徒会活動も主体的に取り組んでいる。福井の子どもたちは、しっかりしているが、自分の思いや考えを発表するのが下手である。
・（出）はＩＣＴ機器の整備が進んでいる。福井はいまだにチョークと黒板で授業をしており、今後、ＩＣＴ機器活用に対する準備が必要である。
・忘れ物を学校に届ける保護者が多かったり、子どもに重い物を持たせない先生がいたりする。福井の教育のさらなる向上のためには、「手をかけるのではなく、目をかける教育」が大切である。

○小松郁夫教授からの提言

学力の高さに定評がある、秋田と福井の共通点を考えてみます。両県とも先生が真面目で、家庭が協力的です。家庭も地域も教育への関心が高く、自然に町の文化、家の文化になっています。

２０世紀から２１世紀前半において、つけさせたい学力という点では、これまでのやり方で成果を収めることができると思います。しかし、独創的な考え方を持ち、発表力・発信力のある人間を育てていかないと、世界の大きな競争の中で立ち向かっていくことはできません。２０年、３０年先ではなく、もっと近い将来の１０年後、５年後でも、今のままではだめでしょう。自分たちの優れた状況に満足せずもっと上を目指すためには、教育委員会を中心として、授業のやり方やあり方の発想を変えていく「イノベーション」が大切です。

これからは、「知らないから学ぶ」「できないから学ぶ」のではなく、「共に生きていくために学ぶ」ことが求められています。福井県は基礎学力が高く、求められる学力を培う基盤があります。

日本はもともと、チームワークや組織力は高いものを持っています。しかしこれからは、「一人ひとりが輝いていく教育」も大切です。つまり、「チーム力を上げていくと同時に、一人ひとりの選手が個人としての能力を高めていかなければならない」のです。

福井には、全国の先頭に立って２１世紀型の新しい学び、新しい学校づくりを打ち出していくことができるしっかりした土台があります。２１世紀の真ん中か、もっと先を見据えて、福井が全国の教育を引っ張っていくことを期待しています。

中・高教員向け

中高の接続に留意した授業改善

「学力向上センター」では、「福井型１８年教育」の大きな柱の１つとして、中高の接続を重視して学力を向上させる取組みに、平成２４年度から着手しています。昨年度、改善事例を新たに追加し、２年間で６８件の事例を作成しました。本年度も昨年度同様、その事例の中から重点ポイントを抜粋し、下記に示します。これらの重点ポイントについては、必ず授業実践をお願いします。また、これらの事例に留意した公開授業を、各教科で実施します。中高の教員がともに学び合うよい機会ですので、積極的に参加してください。

「中高授業接続ガイド」教科別重点ポイント

	中 学 1 年	中 学 2 年	中 学 3 年
国語	○『言葉を集めよう もっと「伝わる」表現を目ざして』…25-01 「おすすめの食べ物の推薦文を書く」という取り組みやすい活動を設定し、情報が明確に相手に伝わるように、わかりやすく推薦文を書く。日常生活の中からさまざまな言葉を集めながら、語彙を豊かにする。	○『平家物語』…24-05 『平家物語』中の登場人物の立場になって『平家物語』の一節を書き換えさせる。この言語活動の工夫によって、古文の表現に親しみを持たせ、当時の人々の生活や考え方に興味を持てるようにし、高校の学習につなげる。	○『論語』…25-06 孔子のものの見方や考え方をとらえ、座右の銘となる『論語』の一節を選び、それを紹介する文章を書かせる。『論語』と自分達の生活とのつながりを考えながら紹介文を書くことで、現代に通じる古人のものの見方や考え方をとらえ、漢文に親しみをもたせる。
社会	○「世界の気候区分」…25-01 中学校では世界の気候の全体像をケッペンの「気候区分地図」で捉えさせることが多いため、高校の「ケッペン気候区分系統図」と区分基準の植生や降水量、気温等の説明を併用することで、マクロの視点で全体像をつかめ、高校での具体的な特徴理解につなげることができる。	○「江戸幕府の改革」…24-02 「大まかな時代の流れと時代の特色をとらえる」学習を、様々な視点から作成したイメージ図を用いることで、理解しやすくなり、高校での詳細な歴史的事象や「総合的に考察させること」につなげる。	○「国際経済の概念」…24-03 中学校での「生徒の身近な消費生活を中心」にした学習内容を十分に扱い、実体験のない国際経済の実例を理解しやすくさせることで、高校における経済法則や理論の学習につなげる。
数学	○「資料の活用」…24-04 代表値の学習の中で、ただ単に平均値等を求めるだけではなく、資料を読み取り、自分なりの考えを出し合うことで、分析することのよさを理解するとともに、高等学校数学Ⅰ「データの分析」を学ぶ必要性を実感する。	○「一次関数」…25-02 関数のグラフの学習で、定数の変化にともなってグラフ全体が移動することを１年生の比例のグラフや３年生の二次関数のグラフと系統性を持って学習することにより、高校におけるグラフの平行移動の学習につなげる。	○「二次関数」…24-03, 25-03 放物線をかく際に、方眼紙を用いず、まず簡易グラフをかいてから、端点と頂点を含めた３つの点に着目して最大値・最小値等を求めることで、高校で学習する関数での、グラフを用いて効率的に関数の問題を解くことにつなげる。
理科	○「大地の変化（ICTの活用）」…25-06 地学分野は広大な時間や空間における自然現象を扱い、観察･実験が困難で、空間概念や時間概念の形成が苦手な生徒が多い。教材不足を補い、視覚的に空間概念や時間概念の形成の具体的なイメージ化を図るためにデジタルコンテンツを活用する。	○「動物の分類」での体験活動の充実…24-04 動物のからだの仕組みとはたらきを理解させるためには、実際に「解剖」などの観察･実験の充実を図る必要がある。新学習指導要領において無脊椎動物を学習するようになり、イカなどの身近な教材を活用して、生物の体のつくりとはたらきの共通性を見いだす。	○「生命の連続性」…25-05 生命の連続性について、中学校では「細胞」、「染色体」を、高校では「ＤＮＡ」を主体として展開されるが、生徒は染色体と遺伝子の関係を捉え切れていない。「遺伝子と染色体の関係」、「減数分裂の意義」までを指導し、高校に継続できる知識の定着を図る。
英語	○「話すこと」の指導…25-07 質問に答えた後１～２文を付け加えて話す。相手を変えてペアトークを何度も行う中で、質問に対する様々な意見や表現に慣れる。高校において、質問に対して３～５文以上でまとまりのある内容で答えるための基礎を養う。	○「読むこと」長文読解の指導…25-03 オーラルイントロダクションやQ&A等で本文の概要をつかむ。速読後、意味のまとまりを意識しながらスラッシュをいれ、リーディングポイントを提示しながら、英文を精読する中で、高校での長文読解の基礎を養う。	○「書くこと」の指導…25-05 トピックに対して生徒間で意見交換をした後、マインドマップ等を活用しながら文と文とのつながりに注意して、自分の意見を英文でまとめて書く。高校での「論理的に書く活動」につなげる。

※「中高授業接続ガイド」を見るためには・・・
福井県教育研究所のトップページ　→　中高授業接続ガイド　→　各教科　→　授業改善事例集
上表の見出しの番号（例：25-01 など）が、授業改善事例集のファイル番号に対応しています。
この表に掲載されている事例については、各教科で必ず実施してください。

連　載

「希望学」⑤　～ 中村尚史氏インタビュー～

「希望学」５回目の連載です。今回は、東京大学社会科学研究所教授の中村尚史氏です。中村氏は４年前から、２か月に１度くらいのペースで福井を訪問され、福井の中核である繊維産業に注目されてきました。近年厳しい状況が続く繊維産業ですが、セーレン（株）の調査を中心に話をうかがいました。

中村 尚史（なかむら・なおふみ）

東京大学社会科学研究所教授。1966 年熊本県生まれ。
専門は日本経済史･経営史、地域経済論。埼玉大学経済学部助教授などを経て現職。
おもな著書に「日本鉄道業の形成－1869 年～1894 年」（日本経済評論社）、
「地方からの産業革命－日本における企業勃興の原動力」（名古屋大学出版会）など。

○福井の何がグローバル企業を引きつけるのか

グローバル企業であるセーレンが、福井にとどまり続ける理由の一つは、教育水準の高い福井の人的資源が活用できる点にあるようです。情報化社会とは言え、海外支社を直接監督することは困難で不安です。そんな時に、離れていても任せられる（信用できる）のが福井の人だというのです。このような考え方は、セーレンに限らず、他の元気なグローカル企業（地方に拠点を置きながら世界展開する企業）にも共通するのではないでしょうか。

○「内なるアウトサイダー（異端者）」が社長になる

川田達男氏（セーレン現社長兼会長）は高校時代、甲子園を目指していました。大学では野球ではなく、経営学の勉強に没頭しました。この「高校時代の野球」と「大学での徹底的な経営学の勉強」が、経営者としての川田氏の原点です。この体験が、氏の自信につながり、リーダーとしての道を開くことにもなります。入社当初から会社批判を繰り返したため、傍流からのスタートでしたが、卑屈にならない強い心も持っていました。

会社は、一度は窓際に押しやっていた「異端者」を、自動車用資材の開発・量産化を成功させた業績を認めて取締役にしました。「目障りだけどすごいやつ」と許容したのです。

起業家（アントレプレナー）は、教育によって育まれるものではありません。アントレプレナーが育つかどうかは、周りが許容するかどうかにかかってきます。結局は、こういった人材の足を引っ張らない、フォロアーシップ（上手に押し上げること）が大切なのです。

○子どもたちが地域の担い手になるために二つのお願い

第一に、一歩間違えば独善的になるかもしれない人材（アウトサイダー）を上手にフォローアップしてあげてください。そのためには子どもたちの素養や将来性を見きわめる力が大切です。現状は、子どもに手をかけすぎ、強制しすぎているのが心配です。

第二に、先生方自身が福井の魅力をよく理解し、こういった企業があることもどんどん発信していただきたいと思います。福井の魅力や福井の企業を語っていただかなければ、子どもたちは知る機会を得られません。企業経営者は、福井の教育に期待しています。

進学校では、高校生が将来のキャリアプランを描けるよう、大学卒業を見据えたキャリア教育が必要です。進学校の目的が難関大学に何人合格させるかになっていては、Ｕターンする学生も増えません。県外の大学に進学しても、実は地元での就職を望んでいる生徒は多いはずです。どうすれば地元に就職できるのかというイメージがないまま大学に進学してしまっているのです。

（平成２６年２月１９日ご本人にインタビュー）

公開授業
報　告

中高の接続に焦点を当てた授業で

中高授業改善交流会（理科）が行われました

Ｈ２５．１０．３１　於：福井市藤島中学校

□公開授業

・授業者　長﨑 充博 教諭　　・授業クラス　２年３組
・授業内容　無セキツイ動物「イカの解剖」　・参観者　合計３１名

中高授業接続ガイドにおける「教科別重点ポイント」

「イカの解剖を通して、動物の体のつくりとはたらきを理解する」
に基づいた授業を実践していただきました

実験方法の説明

イカの外套膜の切開

イカの消化管の観察

今回の授業では、無セキツイ動物の例としてイカを題材として取り上げました。子どもたちは、実際にイカの解剖を行うことで、セキツイ動物の体のつくりとの共通点や相違点を、実感を伴って理解することができました。

普段、何気なく食べているイカですが、子どもたちにとっては体の内部を観察する機会はほとんどなく、内臓など体のつくりを推測して図示しますが、口や肛門などの位置をはっきりと理解していない状況でした。そうした中で、実際にイカの外套膜をハサミで切り開いて内臓を取り出したり、口から色水を注入したりして消化管のつくりを確認することができました。また、眼球から水晶体を取り出し、凸レンズと同じであることも確認できました。

先生の指示のもと、終始落ち着いた雰囲気の中で、子どもたちは協力しながら集中して実験を進めることができていました。

□研究協議会

・参加者　合計３１名

授業者のコメント

二人一組で実験を行ったので、互いに話し合いながら協同で作業を進めることができた。今回の教材には多くの内容が含まれているが、時間の制約もあり消化管と眼球に焦点を当てて指導した。生徒が予想外に集中して作業しているので、説明は極力減らし、観察時間を増やした。

－少人数グループ協議での話題をピックアップ－

＜高校教員から＞

・高校の生物では、軟体動物は今回のように詳しく扱わない。環形動物や節足動物についても理解していない生徒が多い。
・生徒が分かっているものとして、高校では進めている。中学校で実物を使って生物の基礎的な内容を教えていただいていることはありがたい。
・高校では手順を追いながら進めているが、今回は生徒の主体性をもとに進めていた。先生は生徒の気づきを大切にし、生徒同士も意見交換しながら進めている。
・女子でも躊躇なくイカの解剖に取り組んでいた。実験中も生徒の素直な声が聞かれた。
・眼球の切り取りは難しい。眼球専門のはさみを利用するとやりやすい。

＜中学校教員から＞

・生徒は意欲的に活動していた。実物を見る、触るなどのこうした経験が重要であると改めて感じた授業であった。
・事前にイカの内部の予想図を描かせたことにより、今回の授業のねらいがよりはっきりし、活動中に生徒同士で確認し合う場面が見られた。

＊最後に、高校で学習する生物の基礎内容が中学校に移ってきたことなど、履修状況や生徒の学習状況、カリキュラムについての情報交換が行われた。

＜福井市学校教育課 南部指導主事の助言＞

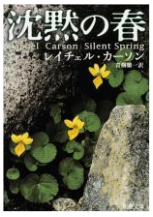
・授業のスキルは、自分だけで身につけていけるものではなく、教師間の話し合いや練り合いによって身につけていけるものである。また、グループを作って授業者など他者の視点で授業づくりを考えることは授業づくりのスキルを高める上で効果的である。
・中高連携のポイントとして、「力の矢印」「力の合成」の指導、「イカの解剖」が挙げられているので、再度確認してほしい。
・今回は、無セキツイ動物としてではなく、生物の代表としてイカをとらえて授業している。ヒトと似ているところや違うところをとらえていく流れが適切であった。
・生徒は夢中になって解剖していたことから、イカの解剖が魅力ある教材であることがわかる。ただ、時間内にすべての活動をおさめるのは難しく、準備してあったマニュアルを活用するなど、教師の発話を少なくする工夫が必要である。
・前時にイカの体のつくりを予想させたことが効果的に働いていた。前時－本時－次時の流れの中で、生徒が解剖の感動を味わい、人体との比較ができる実りある活動になっていた。また、イカの解剖についてのノウハウがたくさん得られ、私自身も大変参考になった。

※助言者の所属は、昨年度のものです。

参考図書

■司馬遼太郎「この国のかたち」(1)～(6) 文春文庫(採用内定者研修図書)

歴史小説で、評論で、対談でと、さまざまな形で「日本」を論じ続けてきた著者が、そのエッセンスというべきものを綴ったベストセラー。日本は世界の他の国々とくらべて特殊な国であるとはおもわないが、多少、言葉を多くして説明の要る国だとおもっている。長年の間、日本の歴史からテーマを掘り起し、香り高く稔り豊かな作品群を書き続けてきた著者が、この国の成り立ちについて研澄まされた知性と深く緻密な考察をもとに、明快な論理で解きあかす白眉の日本人論。(Amazon ウェブサイトより)



■レイチェル・カーソン「沈黙の春」新潮文庫(採用内定者研修図書)

自然を破壊し人体を蝕む化学薬品。その乱用の恐ろしさを最初に告発し、かけがえのない地球のために、生涯をかけて闘ったR・カーソン。海洋生物学者としての広い知識と洞察力に裏付けられた警告は、初版刊行から四十数年を経た今も、衝撃的である。人類は、この問題を解決する有効な手立てを、いまだに見つけ出してはいない―。歴史を変えた 20 世紀のベストセラー。(Amazon ウェブサイトより)

■池上彰「伝える力」ＰＨＰビジネス新書(採用内定者研修図書)

仕事のさまざまな場面でコミュニケーション能力は求められる。基本であるにもかかわらず、意外と難しい。相づちを打ったり、返事をしたり、目をジッと見たり、あるいは反対に目をそらしたり…。「伝える」には、「話す」「書く」そして「聞く」能力が必須。それらによって、業績が左右されることも往々にしてある。現代のビジネスパーソンに不可欠な能力といえる「伝える力」をどうやって磨き、高めていったらよいのか。その極意を紹介する。(Amazon ウェブサイトより)

芦泉荘からのお知らせ

～ ゆったり温泉、ゆっくりお食事で疲れた体をリフレッシュ！ ～

☆温泉は24時間いつでもご入浴
☆ご夕食はお部屋でゆっくり

【平日価格 1泊2食付 お1人様】

青葉	8,300円
柚山	10,100円
ヘルシー美食	10,300円
文殊	11,900円
足羽	14,900円

ひゃっかりょうらん
百花繚乱

左記料金に+1,500円追加で
5つの特典を利用できます！

【特典1】
チェックイン　14:00
チェックアウト　14:00まで滞在延長サービス
【特典2】
翌日のご昼食をご用意
【特典3】
モーニングコーヒーサービス
【特典4】
滞在中カラオケ使用料無料
【特典5】
芦泉荘イベント参加料無料

☆ 柚山以上のプランでご利用いただくと
芦泉荘宿泊利用補助券2,500円が2枚同時に使用できます。

詳しいお問い合わせは　芦泉荘(0776－77－3200)まで
HP　www4.ocn.ne.jp~rosenso/

バックナンバーをホームページに掲載しています。

福井県のウェブサイト「学習・教育」のページに教育情報誌「明日への学び」のバックナンバーを掲載しています。(http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/asuhenomanabi.html)

明日への学び　で検索してください。

ご意見をお寄せください。

住所　：福井市大手 3-17-1

連絡先：福井県教育庁学校教育政策課

TEL　：0776-20-0295
FAX　：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp